

曙光

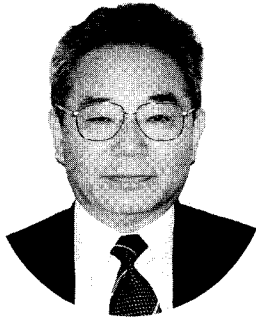


1996. 11. 1
東北大学大学教育研究センター広報 No. 2



川内北キャンパスの構内風景

センター長に就任して	江 幡 武	2
川内での生活から学んだこと ―惜別の辞―	渡 部 治 雄	3
SCS による全学教育の実施について		4
「曙光」の由来について	西 澤 潤 一	6
大学教育研究センターの組織・運営について		6
主な行事日程		9
あとがき		9



センター長に就任して

大学教育研究センター長 江 幡 武

渡部治雄先生が突然5月30日付けで、米沢女子短期大学学長に転出されたその後任として、私は翌日の5月31日付けで、第三代目の東北大学大学教育研究センター長に就任しました。私は理学研究科物理学専攻に所属してはいますが、在任期間中は当センターの仕事を一生懸命やっていきたいと思っています。

現在皆さんが学習しているカリキュラムは、平成5年4月の大学改革によって新たに編成され、実施してまだ4年目のものです。この新カリキュラムが皆さんの学習意欲を刺激し、それなりの成果を挙げていることは疑いのないことでしょう。転換教育科目とか、全学教育科目といった目新しい言葉は、その際に誕生しました。

皆さんは目下、自分の目指した専門分野の専門科目とともに、全学教育として開講している転換教育科目、教養教育科目、基礎教育科目、外国語教育科目、保健体育教育科目を川内北キャンパスで学んでいるに違いありません。また、皆さんは青春時代の真っ只中であって、若さを満喫するとともに、さまざまな悩みを抱え、場合によっては、孤独にさいなまれているかも知れません。私も皆さんの年頃のころ、野草園などを不精髭、げた履きという恰好で散歩していて、まわりからうさん臭そうにみられた（と思って悩んだ）ことを、青春のひとつまとして時になつかしく思い出します。もし、勉学や人生の諸問題その他もろもろの悩みごとがある場合は、一人で抱え込まないで、気軽に各クラスの担任とか学生相談所の諸先生方に、随時、相談して欲しいものです。

高齢化時代の中、皆さんにとって、人生残りの60有余年は途方もなく長く感じられると思いますが、実際体験した者としての実感は、まさしく『少年易老、学難成』です。ですから、全学教育科目を履修する貴重な数年を大切に生活して貰いたいと思うと同時に、当センターで開設・実施しているさまざまな科目が広い意味で、皆さんの役に立って欲しいと願わずにはられません。

センター長として、全学教育の更なる改善を期する上から、特に皆さんから現行のカリキュラムについて、何かと気づいた点があれば、面倒臭がらずに一筆書いてくれることを希望します。宛先は私あてとして、教務班の窓口に提出しても結構ですし、郵便でも構いません。一般的な疑問・意見に対しては、この「曙光」を通じてお応えするつもりでいます。内容によっては、直接ご返事が必要になる場合もあるかと思しますので、連絡先も書いてくれると助かります。



川内での生活から学んだこと

— 惜 別 の 辞 —

前大学教育研究センター長 渡部 治 雄

多くの方々のご指導ご協力を得て川内北キャンパスでの教育の充実と環境の美化に努力してきたが、このたび任期半ばでセンター長の任を辞することとなった。かえりみると昭和47年に旧教養部に着任して以来、実に多くの学生に出会い、教えることを通して多くの事を学ばせて頂いた。その一端を記し、学生諸君へのお別れの言葉としたい。

現代人を孤独な群衆と表現したアメリカの高名な社会学者デヴィッド・リースマンは次のように言う。「社会が高度に産業化され、物質的豊かさにより生活が多様化細分化されるにしたがい、現代人の多くが他人志向型の人間 (man of other-directed type) となり易く、それが大部分の大都市の上層・中産階級の中で多数を形成し、次第に現代人の大半を占めるであろう。」外部の他者の期待や嗜好に敏感な他人志向型の人間は、今や大都市だけでなく、仙台や山形のような中都市や小都市でも確実に増えて来ているようである。

一方、我々60才台以上の人間が受けた教育の目的は、リースマンの表現を借りれば、内部志向型の人間 (man of inner directed type) の育成にあった。大正から昭和ひと桁生れの人間は、「生めよふやせよ」の戦前戦中期から戦後のベビーブームまでの人口増大期に学校教育を受けた。その目標は、社会の流動化が過度に進んだ激動期を生き抜く気概・覇気・頑張り、そのための忍耐・努力にあった。敗戦後に第二の青春を体験した大正生まれの世代と違って、戦後民主主義の時代に青春期に突入した我々昭和ひと桁世代が受けた教育は、伝統的な価値を重視し家族や社会の既成秩序への帰属・同調を説く伝統志向型の人間の否定をめざすものであった。

こうした内部志向型の人間に属する我々にとり、現代の学生諸君の思想と行動を理解し共に生きるべく努力することは大変難しい。なぜなら他人志向型の人間は、生き方を学び行動を決定する場合、両親や教師などの経験を積んだ「人生の先達」よりも、生活圏を共有するごく親しい仲間か、せいぜいマスメディアを通して間接的に知る同世代人の意見や振舞いを基準にする傾向が強く、我々の世代は初めから関わりを期待されず、交わりを拒絶されている存在であるらしいからである。

しかし私が東北大学で出会った多くの学生から受けた印象は、こうした若者像と遠く隔った場合も少なくない。情報に敏感で、他人の期待や願望に対する感受性に富む他人志向型の人間にも、情報の中に快楽を求め、おしゃべりの中に際限のない時間をつぶし、人当たりがよく、他人が不快にならないよう気を配る社交上手な学生もおれば、快楽志向の強い友人達の中であって、社交的でなく、社交的であろうともせず、自己の内面に関心やエネルギーを集中させ、だじゃれや言葉の遊戯に終るような軽薄な会話には頑として心を閉ざす学生も、そうした閉鎖性が他人に不快感を与えはしないかと悩む学生もいた。

こうした多様な学生のありのままの姿をそのまま受け入れ、それにより得られる共鳴の関係を軸として交わりを成立させようとするれば、まず教師の我々の側が（内部志向型の教育から）身につけた価値観や、それにより作り上げた「現代の学生像」という既成のイメージから解放されなければならない。しかし、この「自分からの解放」は大変に難しい。むしろ既成の価値観を曳きずりながらそれを率直に学生にぶっつけていく、そうでなければ学生は決して我々に心を開いて呉れないであろう。川内での24年間の生活から私が学んだ成果は色々あるが、その最大の成果の一つがこのような学生諸君との共生の姿勢であった。

終わりに、このキャンパスで学んだものが、今後永い生涯をかけて作られていく一人ひとりの教養の核となることを願い、諸君への惜別の辞としたい。

SCS による全学教育の実施について

大学教育研究センター

スペース・コラボレーション・システム(SCS)が本年10月2日から運用され始めました。これは通信衛星を介して各大学・研究機関に開設された小型地上局(VSAT)間で映像・音声信号の交換を行うためのネットワークです。その運用は、文部省放送教育開発センターが衛星回線の確保や制御信号の発信などによりVSAT間の運用などを支援することにより行われます。このシステムの概念図は下に示すとおりで、放送教育開発センターの支援のもとに各VSAT間で双方向の音声・映像による対話ができることになります。

本学にもVSATが3局開設され、その一つ(機関名東北3)が川内北キャンパスのB200教室に設置されました。大学教育研究センターではこのシステムを全学教育科目の実施に利用し、他大学又は本学の他のVSATの間で、相互授業や合同ゼミ及び研究会などや特定の大学や研究機関にしかない映像音響資料や希少教材

の共同利用を行うことにより全学教育科目のカリキュラムを質的に向上させることを考えております。本年度は、神戸大学を議長局として九州大学及び本学の3大学間で相互授業を行うことを企画しています。これは、神戸大学が開講している総合教養科目Ⅲのうち『健康の科学』を受信して、九大と本学とが全学教育科目の一部として聴講させるものです。ただし本年度は、神戸大と本学との学年暦に違いがあるため、全てを利用することができず、1月16日講時外にB200教室で行われる総合科目の一部で利用することになります。

当センターでは来年度から本格運用されるこのシステムを利用する計画を研究中ですので、全学の先生方からの御協力が得られますようお願いいたします。また、このシステムを利用して受講または受講させたい講義などがあれば、全学教務委員会宛アイデアをお寄せ下さい。

(文責 蛭子)

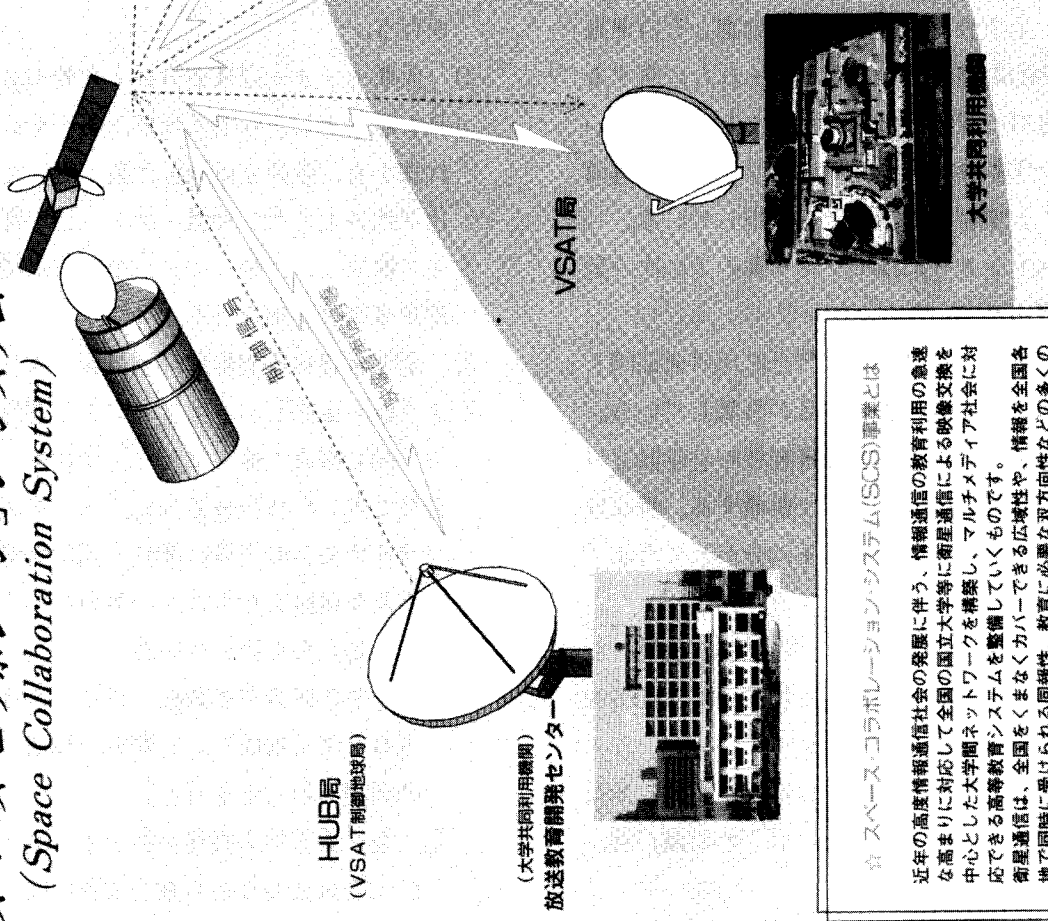
スペース・コラボレーション・システム (Space Collaboration System)

放送教育開発センターでは

- 制御信号により大学等での運用を簡易にします。
- 衛星通信回線を確認し大学等の利用に供します。
- ネットワーク利用の各種イベントの実施に協力します。
- 大学等と連携して共同研究を行います。
- 大学等間の連絡調整を行います。

大学等では

- 大学等間での相互授業、合同ゼミなどに利用できます。
- シンポジウム、研究会、研修会などに利用できます。
- 映像音響資料、稀少教材の共同利用ができます。
- 研究打ち合わせ等各種会議に利用できます。



☆ スペース・コラボレーション・システム(SCS)事業とは
 近年の高度情報通信社会の発展に伴う、情報通信の教育利用の急速な高まりに対応して全国の国立大学等に衛星通信による映像交換を中心とした大学間ネットワークを構築し、マルチメディア社会に対応できる高等教育システムを整備していくものです。
 衛星通信は、全国をくまなくカバーできる広域性や、情報を全国各地で同時に受けられる同報性、教育に必要な双方向性などの多くの特質を有しています。

大学等間における相互授業

B大学

A大学

「曙光」の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であらう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であらう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える草はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

総長 西澤潤一

大学教育研究センターの組織・運営について

東北大学大学教育研究センター（以下大教センターと書く）は、「学内共同教育研究施設」として平成5年4月1日から設置された。その目的は、全学教育科目の企画・立案とその実施及び全学的調整を図ることと、それらに資するための資料の収集や研究を行うことである。いわば、全学教育科目を受講する学生の厚生補導面を除く、学習上の諸事項を分担している。

(1) 大教センターにはセンター長の下に次の組織が置かれている。

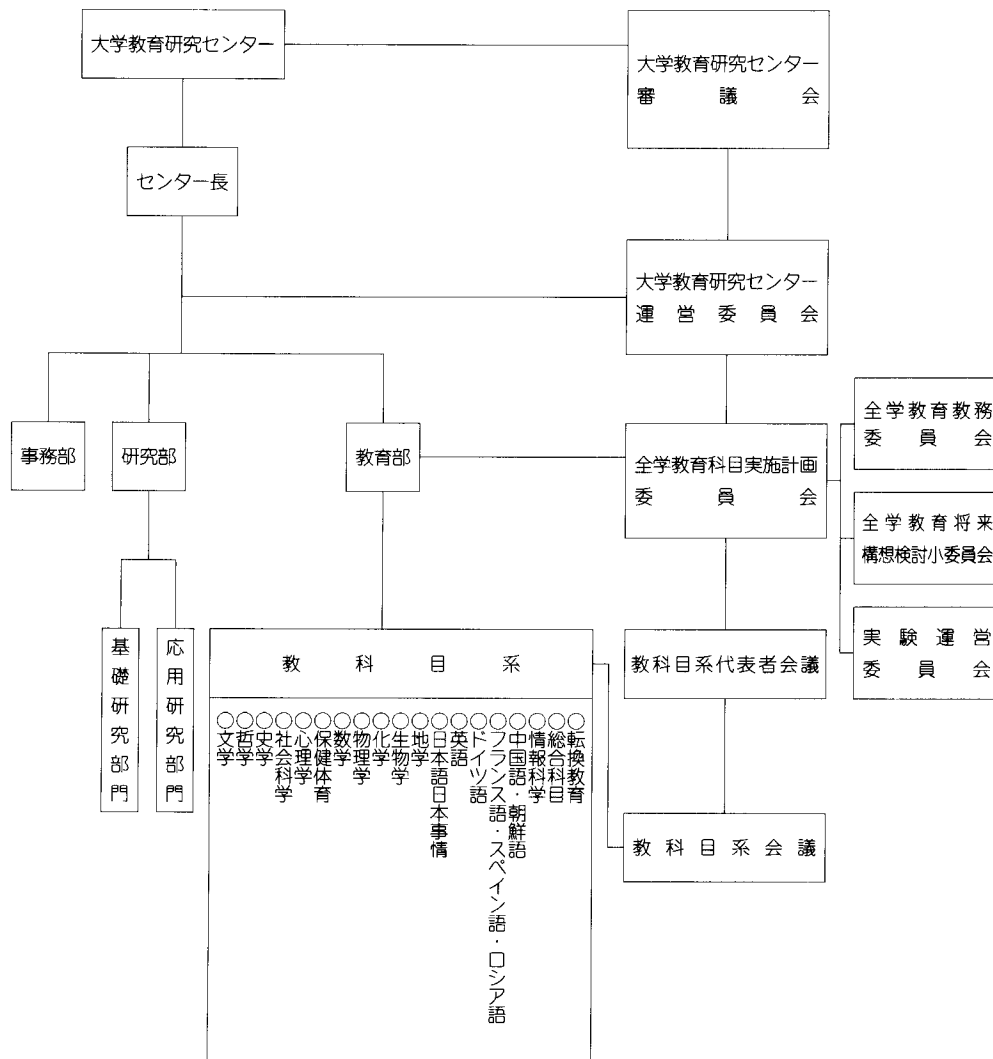
- 1) 研究部：基礎研究部門と応用研究部門とからなり、専任教員4名が所属している。
- 2) 教育部：各学部及び研究所の全学教育科目を分担している教員で組織する。現在置かれている19の教科目系に分かれて所属する。
- 3) 事務部：大教センターの庶務、教務、会計等の業務を担当する。現在国際文化研究科等事務部がこれに当たっている。

(2) 全学教育科目の企画・立案及び実施にあたって審議し、監視する為に以下の組織が置かれている。

- 1) 大教センター審議会：総長を委員長として各部局長で構成し、大教センターの運営に関わる重要事項の基本方針の策定・審議を行う。
- 2) 大教センター運営委員会：大教センター長を議長とし、各学部代表1名、全研究所代表1名、各独立研究科代表1名、言語文化部長代表1名及び大教センターの専任教員とで構成し、大教センターの運営に関する重要事項の審議を行う。
- 3) 全学教育科目実施計画委員会：大教センター長を議長とし、大教センター運営委員会と同じ構成母体（ただし、大教センター委員2名）に教科目系代表5名で構成し、全学教育科目の実施に関する問題を審議・立案及び調整を行う。この委員会の下に次の3小委員会を置いている。
 - ① 全学教育教務委員会：実施計画委員会委員7名で構成し、時間割の編成や日常的問題への対応を行う。
 - ② 全学教育将来構想検討小委員会：実施計画委員会委員から教務委員を除く委員

- 全員で構成し、全学教育の現状分析と改善点の検討を行う。
- ③ 実験運営委員会：理系6学部代表各1名と実験担当4教科目委員4名と大教センター委員1名とで構成し、理科実験(物・化・生・地)の運営に関する基本方針の立案と実施及びその点検を行う。
- 4) 教科目系代表者会議：全学教育の実施計画案(開設科目、時間割等)について、各教科目系から提出された素案について審議し、原案の作成を行う。
- 5) 教科目系会議：専門分野別に19の教科目系会議を置き、実施計画の素案(開設科目、授業担当者等)の作成を行うと同時に、教科目系の運営に当たる。
- (2)であげた大教センター審議会を除く各種委員会の委員名を下に記した。
- 全学教育に関する問題で疑問のある学生は、所属する学部の教務掛または国際文化研究科等事務部の教務第一掛及び教務第二掛に問い合わせてください。教務第一掛・同第二掛は、管理棟二階に置かれている。

大学教育研究センター組織図



大学教育研究センターの各種委員会

○大学教育研究センター運営委員会

委員長 江幡 武 (センター長)	委員 菊池 武剋 (教育学部教授)
委員 大坪 一夫 (文学部教授)	委員 谷本 雅之 (経済学部助教授)
委員 河野 正憲 (法学部教授)	委員 高坂 知節 (医学部教授)
委員 小田 忠雄 (理学研究科教授)	委員 大泉 康 (薬学部教授)
委員 大家 清 (歯学部教授)	委員 折谷 隆之 (農学部教授)
委員 柳澤 栄司 (工学研究科教授)	委員 福地 肇 (情報科学研究科教授)
委員 橋田 坦 (国際文化研究科教授)	委員 関本英太郎 (言語文化学部教授)
委員 坪内 和夫 (電気通信研究所教授)	委員 葛生 政則 (大教センター助教授)
委員 蛭子 栄昉 (大教センター教授)	
委員 富田 真 (大教センター助教授)	

○全学教育科目実施計画委員会

委員長 江幡 武 (センター長)	委員 笹田 博通 (教育学部助教授)
委員 原 純輔 (文学部教授)	委員 谷本 雅之 (経済学部助教授)
委員 河野 正憲 (法学部教授)	委員 近藤 尚武 (医学部教授)
委員 佐藤 繁 (理学研究科教授)	委員 大内 和雄 (薬学部教授)
委員 菊地 正嘉 (歯学部教授)	委員 折谷 隆之 (農学部教授)
委員 宮城 光信 (工学研究科教授)	委員 福地 肇 (情報科学研究科教授)
委員 橋田 坦 (国際文化研究科教授)	委員 関本英太郎 (言語文化学部教授)
委員 田村 眞理 (加齢医学研究所教授)	委員 市来津由彦 (教科目代表・助教授)
委員 佐藤勢紀子 (留学生セ助教授)	委員 秋月 端彦 (教科目代表・教授)
委員 芹澤 英明 (教科目代表・助教授)	委員 佐藤 明 (教科目代表・助教授)
委員 楠田 格 (教科目代表・教授)	委員 富田 真 (大教センター助教授)
委員 蛭子 栄昉 (大教センター教授)	

○全学教育教務委員会

委員長 蛭子 栄昉 (大教センター教授)	副委員長 河野 正憲 (法学部教授)
委員 笹田 博通 (教育学部助教授)	委員 近藤 尚武 (医学部教授)
委員 菊地 正嘉 (歯学部教授)	委員 秋月 瑞彦 (教科目代表・教授)
委員 楠田 格 (教科目代表・教授)	

○実験運営委員会

委員長 武部 雅汎 (工学研究科教授)	副委員長 内田和喜男 (教科目選出・教授)
副委員長 吉藤 正明 (理学研究科教授)	委員 山田 正 (歯学部教授)
委員 宗像 浩 (医学部助教授)	委員 金濱 耕基 (農学部教授)
委員 永沼 章 (薬学研究科教授)	委員 嶋田 一郎 (教科目選出・教授)
委員 甲 國信 (教科目選出・教授)	委員 永広 昌之 (教科目選出・助教授)
委員 蛭子 栄昉 (大教センター教授)	

主な行事日程

平成 8 年度全学教育科目授業等にかかる後期日程は以下のとおりである。

10月1日(火)～12月20日(金)	第2・4セメスター授業
10月14日(月)	履修カード提出期限
10月14日(月)	履修科目届提出期限
11月1日(金)～11月4日(月)	大学祭(休講)
12月24日(火)～1月3日(金)	冬季休業
1月6日(月)～1月27日(月)	第2・4セメスター授業
1月17日(金)	大学入試センター試験実施に伴う休講
1月28日(火)～2月10日(月)	補講
2月12日(水)	学期末休講

あ と が き

*大学教育研究センターニュース第1号を出してはや半年になろうとしている。この間、当センターにとって、センター長の交代と11月には西澤潤一総長のご退任されるという大きな変化があった。

*前センター長渡部治雄教授は、5月30日で退官され、新センター長として江幡武教授(理学研究科)が着任された。渡部前センター長は教養部長時代から大学教育研究センター長で退官なさる迄の間、一般教育と全学教育の舵取に心血を注がれ、本学の教育を支えてこられた。この御苦勞に対し、改めて感謝申し上げたい。また、新センター長江幡武教授には、基礎固めが未だ終らない全学教育の発展の為に、ご尽力頂けるよう期待を込めてお願い申し上げたい。

*西沢潤一総長は、教養部廃止を伴う教育体制の改革に際して、本センターの新設をはじめ、

独立研究科の新設等数々の業績を上げられた、なかんずく全学教育体制の発展のためご尽力頂いたことについて、心から感謝申し上げます。本センターとしても今後ますます全学教育体制が発展するよう努めることが西澤総長のご尽力を無にしない道と思う。

*センターニュース第2号から、学生向けのニュースの名前を「曙光」と命名した。この名前は、大変ご多忙な西澤総長に無理にお願いし、お選び頂き、さらに、墨書して頂いたものである。今後この名前のように、本ニュースが学生と教職員の双方から良きコミュニケーションの手段として発展することを願って止まない。そのために、学生諸君からの投稿を期待したい。

(文責 蛭子)